日蓮大聖人御書全集

曽谷二郎入道殿御返事

そやじろうにゅうどうどのごへんじ

新版1448～1454

曽谷二郎入道殿御返事

弘安4年（'81）閏7月1日　60歳　曽谷教信　日蓮

去ぬる七月十九日の消息、同三十日到来す。世間のことは、しばらくこれを置く。専ら仏法に逆らうこと、法華経の第二に云わく「その人は命終して、阿鼻獄に入らん」等云々。

問うて云わく、「その人」とは、何らの人を指すや。

答えて云わく、次上に云わく「ただ我一人のみ、能く救護

をなす。また教詔すといえども、信受せず」。また云わく「もし人信ぜずして」。また云わく「あるいはまた顰蹙して」。また云わく「経を読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懐かん」。また第五に云わく「疑いを生じて信ぜずんば、即ち当に悪道に堕つべし」。第八に云わく「もし人有ってこれを軽毀して『汝は狂人なるのみ。空しくこの行を作して、終に獲るところなからん』と言わば」等云々。

「その人」とは、これらの人々を指すなり。彼の震旦国の

天台大師は、南北の十師等を指すなり。この日本国の伝教大師は、六宗の人々と定めたるなり。

今、日蓮は、弘法・慈覚・智証等の三大師ならびに三階・道綽・善導等を指して、「その人」と云うなり。

「阿鼻獄に入らん」とは、涅槃経第十九に云わく「たとい一人独りこの獄に堕つるも、その身長大にして八万由延なり。その中に遍満して、間に空しき処無し。その身周匝して種々の苦を受く。たとい多人有って身また遍満すとも、相妨礙せず」。同三十六に云わく「沈没して阿鼻地獄に在っ

て、受くるところの身形、縦広八万四千由旬ならん」等云々。普賢経に云わく「方等経を謗る。この大悪の報は、応に悪道に堕つべきこと暴雨にも過ぎ、必定して当に阿鼻地獄に堕つべし」等とは、「阿鼻獄に入らん」の文なり。

日蓮云わく、夫れ、日本国は、道は七、国は六十八箇国、郡は六百四、郷は一万余、長さは三千五百八十七里なり。人数は四十五億八万九千六百五十九人、あるいは云わく四十九億九万四千八百二十八人なり。寺は一万一千三十七所、社は三千一百三十二社なり。今、法華経の「阿鼻獄に

入らん」とは、これらの人々を指すなり。

問うて云わく、衆生において悪人・善人の二類有り。生処もまた善悪の二道有るべし。何ぞ日本国の一切衆生一同に「阿鼻獄に入らん」の者と定むるや。

答えて云わく、人数多しといえども、業を造ることこれ一なり。故に同じく阿鼻獄と定むるなり。

疑って云わく、日本国の一切衆生の中に、あるいは善人、あるいは悪人あり。善人とは、五戒・十戒、乃至二百五十戒等なり。悪人とは、殺生・偸盗、乃至五逆・十悪等これ

なり。何ぞ一業と云うや。

答えて云わく、夫れ、小善・小悪は異なりといえども、法華経の誹謗においては、善人・悪人、智者・愚者ともに妨げこれ無し。この故に、同じく「阿鼻獄に入らん」と云うなり。

問うて云わく、何をもってか、日本国の一切衆生を一同に法華誹謗の者と言うや。

答えて云わく、日本国の一切衆生、衆多なりといえども、四十五億八万九千六百五十九人に過ぎず。これらの人々、

貴賤上下の勝劣有りといえども、かくのごとき人々の憑むところは、ただ三大師に在り。師とするところ、三大師を離るることなし。余残の者有りといえども、信行・善導等の家を出ずべからざるなり。

問うて云わく、三大師とは誰人ぞや。

答えて曰わく、弘法・慈覚・智証の三大師なり。

疑って云わく、この三大師はいかなる重科有るによって、日本国の一切衆生を、経文の「その人」の内に入るるや。

答えて云わく、この三大師は大小乗持戒の人、面には

八万の威儀を備え、あるいは三千等これを具す。顕密兼学の智者なり。しからば則ち、日本国四百余年の間、上一人より下万民に至るまで、これを仰ぐこと日月のごとく、これを尊ぶこと世尊のごとし。なお、徳の高きことは須弥にも超え、智慧の深きことは蒼海にも過ぎたるがごとし。ただし、恨むらくは、法華経を大日真言経に相対して勝劣を判ずる時は、あるいは「戯論の法」と云い、あるいは「第二」「第三」と云い、あるいは教主を「無明の辺域」と名づけ、あるいは行者をば「盗人」と名づく。彼の大荘厳仏の末の

六百四万億那由他の四衆のごとき、各々の業因異なりといえども、師の苦岸等の四人とともに同じく無間地獄に入りぬ。また師子音王仏の末法の無量無辺の弟子等の中にも、貴賤の異なり有りといえども、同じく勝意が弟子となるが故に、一同に阿鼻大城に堕ちぬ。今、日本国またまたかくのごとし。

去ぬる延暦・弘仁年中、伝教大師、六宗の弟子檀那等を呵責する語に云わく「その師の堕つるところ、弟子もまた堕つ。弟子の堕つるところ、檀越もまた堕つ。金口の明説、

慎まざるべけんや、慎まざるべけんや」等云々。

疑って云わく、汝が分斉に、何をもって三大師を破するや。

答えて云わく、予はあえて彼の三大師を破せざるなり。

問うて云わく、汝が上の義は、いかん。

答えて云わく、月氏より漢土・本朝に渡るところの経論は五千・七千余巻なり。予ほぼこれを見るに、弘法・慈覚・智証においては、世間の科はしばらくこれを置く、仏法に入っては謗法第一の人々と申すなり。

「大乗を誹謗する者は、箭を射るよりも早く地獄に堕つ」とは如来の金言なり。はたまた、謗法罪の深重なることは、弘法・慈覚等、一同に定め給い畢わんぬ。

人の語はしばらくこれを置く。釈迦・多宝の二仏の金言虚妄ならずんば、弘法・慈覚・智証においては、定めて無間大城に入り、十方分身の諸仏の舌堕落せずんば、日本国中の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生は、彼の苦岸等の弟子檀那等のごとく阿鼻地獄に堕ちて、熱鉄の上にお

いて仰臥して九百万億歳、伏臥して九百万億歳、左脇に臥

して九百万億歳、右脇に臥して九百万億歳、かくのごとく熱鉄の上に在って三千六百万億歳なり。しかして後、この阿鼻より転じて他方に生まれて、大地獄に在って無数百千万億那由他歳、大苦悩を受けん。

彼は小乗経をもって権大乗を破せしも、罪を受くること、かくのごとし。いわんや、今の三大師は「いまだ真実を顕さず」の経をもって三世の仏陀の本懐の説を破するのみにあらず、あまつさえ一切衆生成仏の道を失う。深重の罪は、過・現・未来の諸仏も、いかでかこれを窮む

べけんや、いかでかこれを救うべけんや。

法華経の第四に云わく「已に説き、今説き、当に説くべし。しかもその中において、この法華経は最もこれ難信難解なり」。また云わく「最もその上に在り」。ならびに薬王の十喩等云々。他経においては華厳・方等・般若・深密・大雲・密厳・金光明経等の諸教の中に、経々の勝劣これを説くといえども、あるいは小乗経に対してこの経を第一と曰い、あるいは真俗二諦に対して中道を第一と曰い、あるいは印・真言等を説くをもって第一となす。これ

らの説有りといえども、全く已今当の第一にあらざるなり。しかれども、末の論師・人師等、謬執年積もり、門徒また繁多なり。

ここに、日蓮、彼の依経に無きの由を責むるあいだ、いよいよ瞋恚を懐いて、是非を糾明せず、ただ大妄語を構えて国主・国人等を誑惑し、日蓮を損ぜんと欲す。衆千の難を蒙らしむるのみにあらず、両度の流罪、あまつさえ頸の座に及ぶ、これなり。これらの大難、忍び難きこと不軽の杖木にも過ぎ、はたまた勧持の刀杖にも越えたり。

また法師品のごとくんば「末代に法華経を弘通せん者は如来の使いなり。この人を軽賤するの輩の罪は、教主釈尊を一中劫に蔑如するに過ぎたり」等云々。今の日本国には、提婆達多・大慢婆羅門等がごとく無間地獄に堕つべき罪人、国中三千五百八十七里の間に満つるところの四十五億八万九千六百五十九人の衆生これ有り。彼の提婆・大慢等の無極の重罪をこの日本国の四十五億八万九千六百五十九人に対せば、軽罪の中の軽罪なり。

問う。その理、いかん。

答う。彼らは悪人たりといえども、全く法華を誹謗する者にはあらざるなり。また提婆達多は恒河第二の人なり。第二は一闡提なり。今の日本国の四十五億八万九千六百五十九人は、皆、恒河第一の罪人なり。

しからば則ち、提婆が三逆罪は軽毛のごとし、日本国の上に挙ぐるところの人々の重罪はなお大石のごとし。定めて梵釈も日本国を捨て、同生同名も国中の人を離れ、天照太神・八幡大菩薩もいかでかこの国を守護せん。去ぬる治承等の八十一・二・三・四・五代の五人の大王

と、頼朝・義時と、この国を御諍いあって、天子と民との合戦なり。なお鷹駿と金鳥との勝負のごとくなれば、天子の頼朝等に勝たんこと必定なり、決定なり。しかりといえども、五人の大王は負け畢わんぬ。兎、師子王に勝ちしなり。負くるのみにあらず、あまつさえ、あるいは蒼海に沈み、あるいは島々に放たる。誹謗法華いまだ年歳を積まざる時、なおもってかくのごとし。今度は彼に似るべからず。彼はただ国中の災いばかりなり。

その故は、ほぼこれを見るに、蒙古の牒状已前に、去ぬ

る正嘉・文永等の大地震・大彗星の告げによって再三これを奏すといえども、国主あえて信用無し。しかれども、日蓮が勘文ほぼ仏意に叶うかの故に、この合戦既に興盛なり。この国の人々、今生には一同に修羅道に堕ち、後生には皆阿鼻大城に入らんこと疑いなきものなり。

ここに、貴辺と日蓮とは師檀の一分なり。しかりといえども、有漏の依身は国主に随うが故に、この難に値わんと欲するか。感涙押さえ難し。いずれの代にか対面を遂げんや。ただ一心に霊山浄土を期せらるべきか。

たとい身はこの難に値うとも、心は仏心に同じ。今生は修羅道に交わるとも、後生は必ず仏国に居せん。恐々謹言。

弘安四年閏七月一日

日蓮　花押

曽谷二郎入道殿御返事